

21.9.16

30

鹿大の チカラ

KAGOSHIMA
UNIVERSITY

生涯学習
教育研究センター

小栗 有子 准教授(37)



持続可能な開発——。「将来世代が必要とするものを損なわず、現世代が必要とするものを満足させる開発」のことを指す。

小栗有子准教授は、その開発を実践するための人材育成をする環境教育が専門だ。住民自らが考え、行政と一緒にやって地域づくりをする。そのことで将来を見据えた社会の構築を目指す。

「持続可能な開発」を語る例として、小栗准教授は川をめぐる問題を挙げる。

川は水で、命の源。モノ作り

の分野でも必要な資源だ。しかし、上流で例えば畜産業による過度な汚染があると、それが下流域に影響し、市民生活や漁業

が打撃を受ける。

でも畜産業の人たちにも生活があり、地域住民にとっても直接、間接的に必要な仕事だ。結局、産業振興優先か生活環境優先かの選択になれば、どちらをとっても持続可能な開発は実現できなくなる。

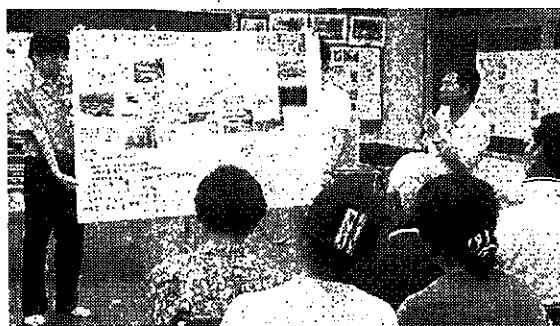
そこで、行政は畜産で出る屎尿などを新たな資源として活用できないかと考える。自然廃棄物をエネルギーに変えようバイオマスセンターをつければ、今度は効率的に稼働させるため、一般家庭のゴミの投入が必要とされる。地域

住民もゴミ分別をしないといけなくなり、最終的には地域住民を巻き込んだ形でないと、持続可能な開発は進んでいかない。

い。

この事例のポイントは「地域住民の協力が不可欠」という点」と小栗准教授は話す。「持続可能な開発」を実践するために、住民意識を高めることが求められる。

地域づくりへ官民一体



小栗准教授は数年前から垂水市とタッグを組んで活動している。垂水市は平成の大合併で、合併しない道を選択した。少子高齢化、産業の衰退……。様々な問題を抱えながらも合併しながらも合併しないことで危機感を持ち、自らの活路を模索していた。鹿児島大と協力し、「職員と住民の手づくり」の総合計画策定へと動き出したという。

まずは、鹿大の水産学部や教育学部の教授らが、高齢者の健康や生きがいづくり、垂水の海や山の資源に関する出張講座を開催。次に、地域資源や少子高齢化問題などについて問題提起した。受講生の市職員や市民は班に分かれて意見を出し合い、問題意識の共有や改善点を話し合った。

現在は大野地区（84世帯人口148人、高齢化率約45%）をモデル地区にし、地域振興の計画づくりを進めている。いわゆる行政と住民の距離が近くなった

住民たちは公開講座を通じて宿泊型講座で作成した絵地図を住民に説明する垂水市職員＝小栗准教授提供

「もともとある垂水への誇りや愛着を、自分たちで気づき直す。すると地域づくりは前に進むんです」。垂水市の挑戦を通して、住民自治を育てるなどの大きな社会に提起する。